



## 01 歴史文化学科の活動ほか

### 第3回甲南大学西洋史研究会開催

甲南大学のなかで西洋史を深く学びたい人たちが集う研究会を昨年から開催しています。教員だけでなく、学生も一緒になって、本学の西洋史研究を発展させようという意図です。2023年3月24日には第3回目の研究会が開催されました。吉本淳哉氏（2年生）が、「近代スペインと「自由主義」—カディス憲法を中心として—」と題する報告をし、林孝洋氏（本学非常勤講師、イタリア近代史）からヨーロッパ近代史における自由主義と憲法の理解に関するコメントをいただきました。また、阿久根晋氏（本学非常勤講師、ポルトガル近世史）にも討論に加わっていただきました。学生たちも鋭い質問を投げかけ、積極的に討論に参加し、充実した会となりました。今後とも、不定期ではありますが、研究会を継続していくつもりです（教員・高田 実）。



### 東谷ゼミ合宿：宮城県仙台市・松島町



2023年2月20・21日、東谷ゼミの2・3回は、宮城県仙台市・松島町を訪問しました。1日目は仙台城や瑞鳳殿などの史跡を見学し、仙台藩や伊達政宗公に関する歴史を学びました。2日目には松島を訪れ、近世より「日本三景」と称された風光明媚な土地柄や生活を体感するとともに、瑞巖寺や福浦島などの寺社の見学も行い、その歴史に触れました。もちろん、牛タンやずんだ餅、海鮮など絶品グルメもしっかりと堪能しました。機会があればまた行きたいと感じられる、とても充実した合宿となりました！（2回生・大槻耕央）

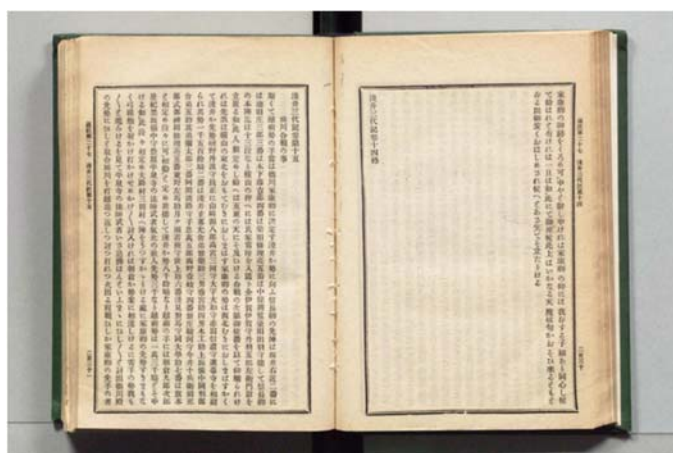
歴らぼ通信の刊行は、これで20号となりました。歴らぼ通信では、歴史文化学科における様々な活動を紹介しています。通信に記載される記事の多くは、ホームページ「歴らぼのWEBサイト」（<https://www.konan-u.ac.jp/hp/rekibun/>）でも紹介していますので、そちらもご覧下さい。なお、各記事を書いた学生の年数は記事の時期に合わせています。



2023年2月28日に歴史文化学科の卒業論文発表会がありました。対面とズームあわせて30名以上の参加となりました。今回は4人の先輩方の非常にユニークで専門的な論文を見聞きし、学年を問わず質疑応答ができたので大変有意義な時間でした。発表の後、先輩方からそれぞれの「卒業論文の書き方」を伝授していただきました。来年度には卒論を書く側になる私にとって、今回の卒論発表会は様々なヒントや“心持ち”を知れる機会でした。また、改めてこうした縦横の関係が非常に賑やかで交流しやすい歴史の風土に「歴史文化学科に来て良かったな～」と感じました。(3回生・河内琉嘉)



### 2022 年度卒業論文・山城理奈（佐藤ゼミ）：軍書における浅井長政の評価の比較



近藤瓶城編『史籍集覧』第6冊，近藤出版部，大正8。国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/3431173>

私は、戦国時代の北近江（現在の滋賀県）を統治した浅井長政について研究しました。現代において、浅井長政は織田信長の妹である市を娶った後、信長に背いた「謀反者」として広く知られています。長政は文武に秀でており信長と互角に戦い、周囲に大きく影響を与えました。私は、成立期の異なる軍書である『信長公記』『信長記』『浅井三代記』の三冊を比較し、引用の部分や表現の異同を調べ、浅井氏の評価は著者ごとにどう異なり、どう変化していくのか考察しました。また、先行研究との評価の違いも自分なりに考察しました。比較のため史料の重要な部分はエクセルで一覧表を作り、別表として論文に添付しました。大変で時間のかかる作業でしたが、こだわったことで満足いく論文となりました。

### 2022 年度卒業論文・平松万奈（高田ゼミ）： フランス三色旗の誕生と変容－デザインとレトリックの視点から－

本論は、大きく大革命期、19世紀、第二次世界大戦期に分けて構成されており、三色旗の誕生とそれからの変容をデザインとレトリックの視点から論じている。フランス三色旗の誕生は、フランス大革命期にまで遡る。この標章はパリで生まれたが、「革命祭典」という場によって国全体に広められていき、この3色がフランスにふさわしいということで国旗に定められた。ただ実際に、「国民」全体に三色旗が定着したわけではなかった。ここで重要になったのが、国旗をめぐる人々の「衝突」である。三色旗には、対抗関係にある標章が存在しており、それが「白旗」と「赤旗」であった。本稿では、これらとの衝突の度に、三色旗が人々に記憶されていき、徐々に三色旗が定着されていったと主張する。



H.F. フィリップポトール『1848年2月25日、市庁舎前で赤旗を退けるラマルティエヌ』（1848年頃）  
※ サイト「Paris Musées Collections」より

2022 年度卒業論文・岸本真結子（高田ゼミ）：  
1960～70 年代におけるファッション感覚の変化と女性の自立－『anan』と『装苑』の分析から－

1960～70 年代は自分で作る仕立服から売っている既製服への転換の時期であり、その転換の時期に創刊した『anan』、第二次世界大戦前から続く『装苑』の 2 誌を取り上げ、それぞれの異なる特徴や役割について考察した。『anan』は、当時当たり前であった仕立服を一切排除し、既製服のみの紹介を行った。また既製服だけでなく、強気な文言で女性の自立を支持する姿勢や女性のひとり旅の推奨などによって、当時の女性が求めた自立・解放に大きく貢献した。『装苑』は服を作るために必要な情報を掲載した。しかしその仕立服も既製服のような新しいデザインや形が多く取り上げられ、新しい存在を無視することなく、読者に寄り添う形で紹介していた。女性の社会性や環境を大きく変える流れを作り出した転換期は、まさにファッション史における重大なターニングポイントである。



『anan』創刊号表紙(1970 年 3 月 20 日号)

2022 年度卒業論文・岡本亜有花（高田ゼミ）：  
近代日本における女子の理想－音楽のたしなみと女子の生き方－



20 世紀前半の女子就学者は、学校外での学習で、音楽などの「たしなみ」を身につけることに力を入れていた。それは女子の「幸せな」結婚生活のためであった。近代家族の女子の役割の 1 つは、一家団欒に寄与することであった。音楽は、家族の娯楽、夫との趣味の一致、婦女自身の慰みになり、家内和睦に繋がる。また、楽器を習うことはお金がかかるため、教育にお金をかけているとアピールすることに繋がる。それは女子のイメージとして抜群で、音楽のたしなみを身につけることは花嫁稼業とされていた。女子の幸せ＝結婚だったこの時代、女子本人はともかく、親も自分の娘にふさわしい、あわよくばワンランク上の結婚相手を期待していた。同じ学歴ならば、高い相続文化をもつ女性の方が配偶者の経済力が高くなることが社会学で証明されている。たしなみは婚姻を通じて経済力、そして幸せに変換されていたのである。

『婦人グラフ』 国際情報社 1927 年 4 月号より転載

中町ゼミ巡検：三木モスクなど

2023 年 2 月 10 日、中町ゼミでは、三木モスクの調査を目的に、三木市の巡見を行いました。三木上の丸駅を出て三木城跡やみき歴史資料館を見学した後、ハラルレストランのアルマイダ・ジャパンで昼食を頂いてから、店に直結しているモスクにて集団礼拝の一部始終を見学しました。その後、イマーム（導師）の方のお話を聞く機会があり、シーア派スンナ派の対立がここでもあるのか、女性がどのように扱われているか、などについて詳しい内容を教えて頂きました。次に三木市役所に移動し、国際交流協会の方にも三木モスクの成り立ちや、周辺のムスリム住民のお話をして頂きました。今回の巡検で、日本で暮らすムスリムの実情を知れたことが、異文化交流を考える上での大きな学びとなったと感じました。(1 回生・高尾小雪)



### 読書班・遺跡巡り班の巡見：大阪中之島界隈



2022年11月26日、読書班・遺跡巡り班で大阪巡検を行いました。今回は中之島香雪美術館と適塾の拝観、中之島周辺の近代建築散策を行いました。中之島周辺には多くの近代建築が残されており、特に中之島公会堂と大阪府立図書館のモダンさにはメンバー全員が心惹かれました。ですが僕のおすすめは芝川ビル。何と言っても入り口がロマンありすぎてカッコいい。中之島香雪美術館では伊勢物語の展示をしております、かなり面白かったです。今回の巡検で15km以上歩いたのですが、意外と疲労感はなかったです(笑)。(3回生・畑匡洋)

### 歴史の旅企画班：奈良巡検の感想

2023年2月24日、「歴史の旅企画班」の活動予行で奈良市に行き、興福寺・志賀直哉旧居・新薬師寺・奈良ホテル・ならまち界隈などを訪ねました。そのうち雨の中訪れた志賀直哉旧居を紹介します。白樺派を代表する小説家の志賀直哉自ら設計に関わった空間は彼の拘りが十分に反映しており、一つ一つに注目しながら散策しました。その雰囲気よさに「こういう家に住みたい」という声が続出しました。武者小路実篤や小林秀雄、堂本印象や亀井勝一郎など多くの文化人が訪れていたことから高畑サロンとも呼ばれたそうです。奈良には他にも東大寺観音院や日吉館といった文化人の集う文化サロンが多くありましたが、今はないものも多く、そのような点でも貴重な場所と感じました。(2回生・山田伊吹)



### 「れきぶらまっぷ1 & 2」(2022年度父母の会・学生GP企画)の紹介



私たち歴らぼ探検隊(歴らぼ地図班ほか歴文生13名、指導：鳴海邦匡)は、「2022年度父母の会・学生GP」の支援を受け、「れきぶらまっぷ1 & 2」を作製しました。この地図は私達が実際に現地まで調べた大学周辺の歴文的ポイントを紹介するものです。有名な場所はもちろん、道中で見つけたニッチな歴文的ポイントもあり、ほかの観光地図とは一味違う歴文オリジナルマップとなりました。また、この地図を紹介する展示として、「れきぶらまっぷ」展をギャラリー・パンセで開催しました(2023年5月8日~22日)。ぜひこの地図を手にとって歴ぶらしてみましょ。 (歴らぼ探検隊代表・4回生・畑匡洋/4回生・前田彩花)

### 編集後記

お目通し下さり有難うございます。今回で第20号を迎えました。これまで継続してきたのは記事を執筆してくれた皆様のおかげです。今後も学科や歴らぼの活動を皆様に楽しく知ってもらえるよう発信していきますので、引き続き編集部へのご協力をお願いします。(佐藤) / 歴らぼ通信は10年目に突入です。思えばここまで来たもんだ笑(鳴海)

編集：佐藤葵生(3回生)・高岸敬太(同)・網干理子(2回生)・高尾小雪(同)・鳴海邦匡(教員)  
 発行：甲南大学文学部歴史文化学科 発行日：2023年8月31日  
 連絡先：〒658-8501 神戸市東灘区岡本8-9-1 TEL078-435-2874(学科事務)